

<10月9日(月)>



朝食(7:30~8:30)後、午前は全員で稲刈り体験(雨天決行、9:30~11:30)。午後は、引き続き稲刈り体験コース、源流の森散策コース、ひまわり収穫と油搾り体験コース、白川荘周辺の散策コース、の4つのコースの中から選択。終了後(17:00頃)、白川荘にてグリーン・ツーリズム協議会メンバーと歓迎夕食会。

<10月1日(火)>

朝食(7:30~8:30)後、芋煮会場へ。山形県芋煮の説明・芋煮の準備(9:00~11:00)、芋煮会(芋煮と新米のおにぎりで昼食、11:00~12:00)後、物産館にて買い物(12:30~13:15)。グリーン・ツーリズム終了式(13:15~13:30)後、東京に向けて出発(13:30頃)、池袋着(18:30頃)、解散。

エ 冬のトライアル・ツアー(平成19年2月9日[金]~11日[日])

ツアー参加者は37名、参加者の内訳は、日通グループ社員27名(男性24名、女性3名)、日通グループ社員家族3名、東京農工大学職員女性1名、小学生4名(男児3名、女児1名)、事務局5名、参加7家族(15名)、単独参加22名、東京近郊からの参加者は32名、仙台4名、山形1名。リピート参加者2回目=4名、3回目=11名、4回目=7名、初参加=15名。家族でのリピート参加3回目=3家族、4回目=1家族。飯豊町滞在中の天候は、9日(金)曇り時々晴れ、10日(土)曇り一時雨、11日(日)風雪であった。

<2月9日(金)>

池袋駅(7:45発)――福島・飯坂[C――米沢――飯豊町(15:00頃着)

飯豊町到着後、宿泊場所の「白川荘」へ。

餅つきでの歓迎式後、休憩、入浴。語り部の会による昔話3話(18:00~18:30)。その後、山形・飯豊町の郷土料理で夕食。歓迎式でついた餅も賞味。

<2月10日(土)>

朝食(7:30~8:30)後、班ごとに雪国の農業・農村体験。Aコース・春ツアー時に植えた大豆を使った味噌や豆腐・漬け物など郷土料理体験、Bコース・「かんじき」をはいて茅を使った雪中行事作り(夜の夕食後のイベント用)、Cコース・中西地区での田んぼの田舎暮らし体験。午後は、Aコース・中津川地区の民家ですげ笠(花笠踊り用)・すげ細工など作成、Bコース・かまくら・雪灯籠・雪だるま作り、Cコース・引き続き田ん



ぼの田舎暮らし体験。白川荘にてグリーン・ツーリズム協議会メンバーと歓迎夕食会。夕食後、全員で花笠踊り体験(各体験指導者・スタッフとの交流会)。その後、外で飯豊町の雪中行事「さいぞう笑い」(どんと焼き)で参加者の無病息災と商売繁盛を祈願。
<2月11日(日)>



朝食(7:30~8:30)後、スノーモービル体験、雪合戦。終了後、物産館にて買い物(1



1:15~12:45)。グリーン・ツーリズム体験終了式(12:45~13:00)後、東京に向け出発(13:00頃)、池袋着(20:00頃)、解散。

(3) 日常的な取り組み状況とその到達点

ア 日通本社社員食堂への飯豊町産食材の供給

日通本社ビル14階に社員食堂がある。飯豊町は飯豊町の特産物のPRを兼ねて、「わらびのしょう油漬け」、「みず菜の漬物」を各30kg無料提供し、これを食堂運営会社であるNRE(株式会社日本レストランエンタプライズ)の協力を得て、社員食堂にて試食に供した。開催日は平成18年7月13日・14日・18日・19日の4日間であった。ここでの「わらびのしょう油漬け」と「みず菜漬け」は非常に好評であった。冬ツアー前の2月にも「わらびのしょう油漬け」、「白菜の漬物」各10kgを無料提供した。



平成18年11月6~17日にかけて、飯豊米の利用(飯豊米新米フェア)も行われた。飯豊町の日通体験田所有者である熊谷宗男氏が、秋季トライアル・ツアーにて収穫した「コシヒカリ」900kgを食堂運営会社NREに販売して実現した。NREへの販売価格は340円/kgで、この価格は通常NREが日通本社社員食堂への供用に仕入れている米の価格と同額である。

当初、飯豊の米を「いなげや」に卸す企画もあったが、すでにJAとの取引がありここに割ってはいり、直取引をすることは困難と判断し、日通の研修所・保養所の食堂での利用を検討することになった。最終的には上記のとおり、本社社員食堂での利用ということになった。販売価格の設定については、本社食堂での米購入価格が340円/kgのため、それと同額かそれ以下であれば使用可能との回答があり、結局340円ということになった。

イ 日通社員への飯豊町特産物社内販売

前述のとおり、社員食堂での好評を受けて、「わらびのしょう油漬け」(1袋200g450円)と「みず菜の漬物」(1袋200g450円)についての社内販売を平成18年7月25日～31日に実施した。その結果、「わらびのしょう油漬け」16袋、「みず菜の漬物」18袋、計34袋が8月1日発送された。

ミネラルウォーターの提供の機会もあった。夏のトライアル・ツアー前に山田副社長、久保田常務が飯豊町を訪れた際、「山形飯豊山 秘境の湧き水」1ケース(2Lボトル×10本)を購入し、これを役員会議に提供したようである。

また、上記の社員食堂での「飯豊米新米フェア」と並行して、飯豊米社内販売を平成18年11月6日～17日にわたり実施した。品種は「コシヒカリ」、販売価格は5kg2,500円(送料込)／1袋(内訳:米代金1,900円、送料600円)、販売数は125袋(計625kg)であった。

平成19年1月、日通山形支店・日通商事株式会社が「(株)飯豊めざみの里」と協議し、3月より飯豊産の米の販売を開始することが決まる。商品の反響、商品供給能力、受注体制などを確認して、場合によっては販売地域を東北6県に拡大していくことも検討中。

ウ 日通本社等での広報活動

<日通 IBD>

2006年7月5日以降、下記3カ所の日本通運 IBD に飯豊町のパンフレットを設置してPRを行った。

・人形町IBD: 中央区日本橋人形町2-26-5

・銀座IBD: 港区新橋1-5-2

・ヨドバシAkiba IBD: 千代田区神田花岡町1-1 ヨドバシAkiba 地下1階

8月25日段階で、IBDに飯豊町のパンフレットを置いてもなぜあるのか説明しないと効果はないとの認識に至った。そこで、飯豊町のPR、飯豊町の旅行、飯豊町の特産品のPRなど、全体のストーリーの検討することになった。

9月25日、日通旅行より「めざみの里・山形県飯豊町(いいでまち)」、「『農』ある暮らしと山村ボランティア」(20名)の募集メニューの提案があった。が、まだ具体的な取り組みまで至っていない。

<飯豊町物産市>

9月7日、飯豊町側から日通に対し、飯豊町のPRのために日本通運本社の中と外での物産市の可能性についての打診をした。しかし、「社内の場合は、火が使えず難しい」、「社外は日通の土地だが、公共の場所になっているため使用は困難であるし、そういった実績もない」ということになった。そこで、日通側は、「仙台駅前に日通の土地があり、そこでの物産市の可能性を探る」ことを提案した。

10月30日、飯豊町側は、仙台支店に出向き仙台駅前を視察し、日本通運の仙台駅前営業所の駐車場の一部を使って、物産市を開催すべく検討を依頼した。

その場合の土地利用料が約100万円(2日間)となり(80,000円／1ヶ月1台分のスペース×160台)、現実的に不可能と判断して断念した。また、日通本社のある汐留地区公共スペースの場合も場所を借りるのに高額となり、一団体だけでは到底困難で、県単位や大きなイベントの中の一つとしての参加でないと無理な状況であることが判明した。

<飯豊町物品販売>

6月23日、飯豊町内で物品販売協力できるメンバーで会議を開催し、8月からの各月毎に提供できるメニューを作成。また、値段も購入しやすい、送料込みの3,000円に設定してパンフレットを作成した。しかし、日本通運内での販売には、商品一品一品の商品登録シートの作成や食品衛生管理シートの作成が必要であったため、物品販売の計画が中断したが、10月、11月と日通商事の指導により、一部の商品について提出し、3月発売予定となっている。

<その他の広報活動>

平成18年9月12日～15日に東京ビックサイト(東3・4・5・6ホール)で開催された「国際物流総合展2006」(展示会テーマ:進化するロジスティクスソリューションー安全で環境にやさしい社会の実現ー)において、パネルによる「飯豊町でのグリーン・ツーリズム日通の杜」が紹介された。日通の出展テーマ「安全で環境にやさしい社会の実現」の一環として実施された。日通のブースへの来場者アンケート回答者に、記念品として飯豊米「こしひかり」(2合／1袋)を進呈(合計1,800袋使用)した。

今回の実験事業は、日通の「社内報:日通だより」において紹介され、ツアーに関する記事が掲載された。春季ツアー:2006年6月号、夏季ツアー:2006年8月号、秋季ツアー:2006年11月号にそれぞれ掲載された。冬季ツアーも掲載予定である。

<ふるさと講演会>

飯豊町内のグリーン・ツーリズムへの意識の醸成のため、平成19年1月20日、めざみの里物産館において、タレントのダニエル・カールさん、東京農工大学の矢口芳生教授を迎えて「ふるさと講演会」が行われた。参加人数は23



7名(男性121名、女性116名)、うち町内参加者が(男性66名、女性79名)、近隣の長井市から24名、川西町から15名、南陽市から11名の参加があった。

講演は内容豊かで、意識醸成には十分な効果があった。ダニエル・カールさんから

は、「山形のいいどこいっばいあんべ!!」と題しての話題提供があった。四季がはっきりしているなど、山形の自然環境や社会環境の他県とは違ったいいところがたくさんあり、これに誇りをもち、地域・地域資源を大切にしていくなすべきであると、熱っぽく話された。矢口芳生教授からは、「第3次産業とグリーン・ツーリズム」と題して、農林業の新たな可能性に関しての話題提供があった。

これまで「いいでファンクラブ」の設立が話題となっていたが、この講演会を契機に、ダニエル・カールさんを会長にとの意見が多く、当日それを直ちに打診したが「考慮しておきます」との回答を得た。改めて、2月20日、東京のダニエル・カール事務所に町の担当者が出向き、会長の内諾をいただいた。今後は、「いいでファンクラブ」の企画内容が問われることになる。

エ 日通社内の労働組合、健康保険組合への働きかけ

平成18年5月、労働組合本部に、組合季刊誌への掲載等の協力要請を行う。さらに、7月25日・27日、8月9日にも組合本社支部に、費用補助等の協力要請を行う(現在本社の取組み事項でもあり、組合員の年休促進にも繋がる旨説明)。

これに対し、組合本社支部は、企画そのものは悪くないが今後の結果を踏まえて検討をしたいと回答してきた(費用的な補助についても現状は不可)。さらに、会社主導の企画に少し抵抗をもちつつも、組合の企画としても今後検討したい旨の回答を得る。

健康保険組合にも要請を行った。8月9日、日通健康保険組合に、費用補助等の協力要請を行う(社員の健康増進、メンタルヘルスにも良い旨説明)。

これに対し、日通健康保険組合は、「全社的な取組みではないので、機関紙への掲載による宣伝は不可」、「保養所等は現在閉鎖の方向に向かっており、飯豊町の施設を保養所に使うことも不可」との回答であった。保健組合の性格上、ビジネス的な案内(＝ツアー参加の広告宣伝活動)はそもそも無理なので、社会実験事業の結果を受け、会社としての方向性が固まらない限りは、取組み紹介も厳しいことが判明した。

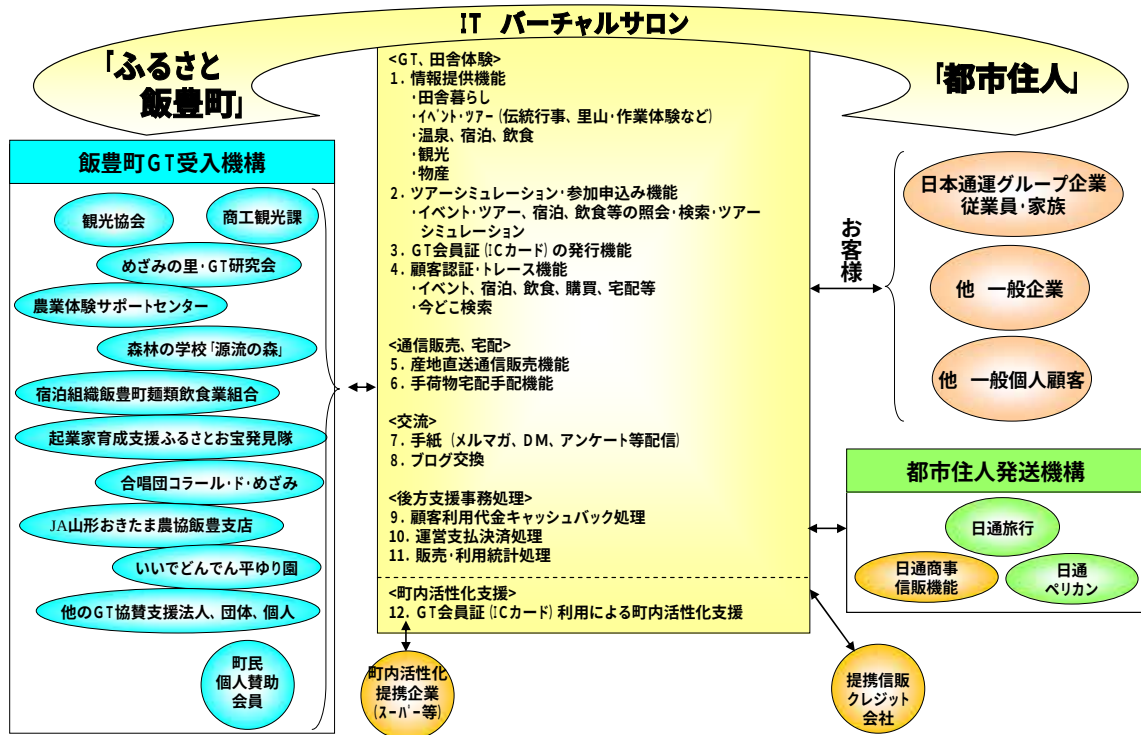
オ バーチャル・サロン

<システムの位置付け>

社会実験企画書作成段階においては、飯豊町GT事業全体を統合管理する情報システムを構築し、ツアーおよび日常交流に広く利用し、事業および顧客の一元管理を実施する計画であった。しかし、実験事業予算規模が約半減したこと、また、それにより企業の社員旅行、社員の家族や個別グループでの自由旅行など、グリーン・ツーリズムの目指すべき最終モデルを想定した実験ツアーを多角的に実施するには限界があり、年4回の団体バスツアーの実施に止めざるを得ないこととなった。そのため、グリーン・ツーリズム統合管理システムの全体コンセプトの必要がなくなり、システムの開発

自体は一部に止めることとした。

そこで、今回は実験ツアーを経た見地から当初企画のシステム機能内容を検証し、飯豊町のグリーン・ツーリズム事業の次年度以降のステップおよび旅行企画運営会社の新事業としてのグリーン・ツーリズム事業に利用可能であろう統合管理システム内容を、日本通運の構想としてここに提案することにした。



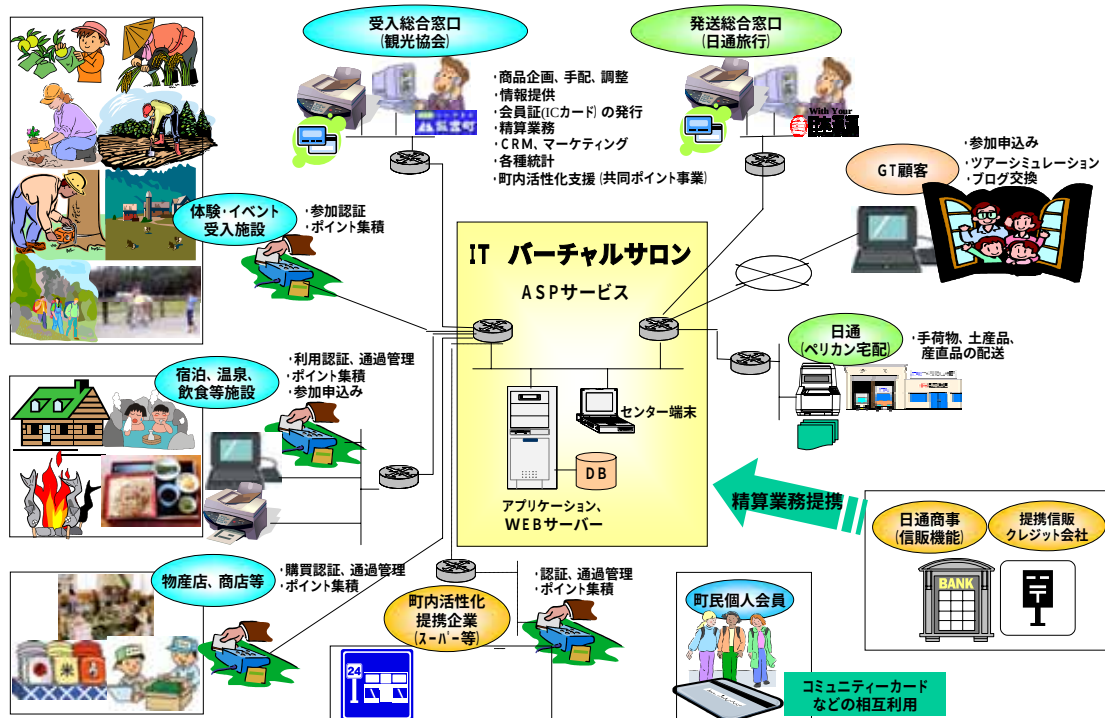
<全体のコンセプト>

統合管理システムのコンセプトはITによるバーチャル・サロンを構築し、都市住人と「ふるさと飯豊町」との相互交流を図り、その絆を確固たるものにすることにある。飯豊町側には観光協会、コーディネーター、受入農家、宿泊・飲食組合、物産店、観光施設などの関係者で構成するグリーン・ツーリズム受入機構を設け、都市側には旅行集客、宅配、物販決済など総合して対処するための都市住人発送機構を設置し、この両者によりシステムを運営する。

システムでは、都市住人への情報提供機能、都市住人が自由にツアーシミュレーションや参加申込み・問い合わせのできる機能により集客する。グリーン・ツーリズム参加者には会員証 (ICカード) を発行し、ツアーでの各イベント参加や宿泊・飲食施設の利用認証、物品の購入や宅配の手配などに利用し特典を得られるようにする。現地ツアーに参加しなくてもバーチャル・サロン上での産地直送販売により飯豊町と都市住人の台所を直結し、グリーン・ツーリズム参加経験者には飯豊町のお母さんやお父さんから手紙 (メールマガジン、DMなど) が届くなど、日常的な交流を深めるための機能を

もつ。

また、事務後方支援機能として、顧客利用代金決済や受入機構・発送機構への支払い決済処理、各種販売・利用統計をとる機能も用意する。また、飯豊町内のグリーン・ツーリズム個人賛助会員にもグリーン・ツーリズム参加証（ICカード）を発行し、他の特典カード（既存の町内商店カードや一般クレジットカードなど）との特典相互利用を可能とすることで町内活性化の一助となることを視野に入れた。



＜機能の概要＞

①情報提供機能

都市と農山漁村の共生・対流を進める上での阻害要因のひとつに、都市住人へ情報伝達という問題がある。現実には農山漁村側が伝えたい内容が一方通行であり、都市住人が本当に知りたいことを提供できていないという問題がある。

そこで、ここでは気軽に問い合わせフォームを利用したり、メールマガジン会員の申し込み登録できるような画面構成とすること、また、問い合わせフォームやメールマガジン申込フォーム上に必ずアンケートページを設け、都市住人のニーズを随時収集する機能を盛り込むこととした。常に都市住人の欲することを把握し、タイムリーに情報内容を更新、提供していくことを重視するものとした。

②ツアーシミュレーション・参加申込み機能

まず、イベントツアー、温泉、宿泊、飲食店、観光案内、物産販売案内などグリーン・ツーリズム全般に渡るメニュー情報を紹介する（この機能はシステムとして稼動済み）。

顧客はいろいろなメニューのなかから、その人の価値観による合理的で効率的な旅行日程を組むことができる。すなわち、朝から夜までどのような移動手段を利用し、どういう経路でたどり、どのようなイベントに参加するかなどある程度の旅程が組める。

しかし、多くの場合、初めての地ではどう行動すべきかの判断ができない。そこで、旅行日程、体験参加希望、予算、移動手段などの選択によるツアー組み立て自動シミュレーション機能を検討した。顧客は画面上で「何を体験したいか」、「宿泊や食事の希望」、「観光希望」などを複数選び、さらに各項目内で自動選択された候補から選択を絞っていき、最後にシミュレーションボタンを押すと複数のシミュレーションパターン（旅行日程計画）を得ることができるようにする。その中から最終的に選んだパターンデータをそのままツアー申込みフォームに展開することができるので、申込みフォームも簡単に作成可能とする。

③グリーン・ツーリズム会員証（ICカード）発行機能

グリーン・ツーリズムへの参加が確定すると、顧客一人毎にIDを付与し、このIDの登録されたICカードをグリーン・ツーリズム会員証として発行する。会員証は顧客の発地の発送窓口（日通旅行）、または着地の受入窓口（飯豊町観光協会）で発行される。会員証は、顧客の要望に合わせてポイント付与機能のみのカード、およびクレジット機能を持ったカードの2種類用意すると利便性が向上する。

④顧客認証・トレース機能

グリーン・ツーリズム会員証を受け取った顧客がツアーを開始すると、飯豊町グリーン・ツーリズム受入機構の各施設（イベント、体験、宿泊、温泉、飲食、物産店、商店等）での参加認証（通過登録、利用登録）を受けたり、それらの施設利用や物品購入において優遇措置（利用ポイントを貯めたり、料金割引）を受けられる。

たとえば、まず、家族全員で稲刈り体験をし、次に果物のもぎ取り体験をする。昼食は名物のそばを食べ、物産館でお土産を購入し、その後はお父さん・お母さんは温泉施設からの迎えで山奥の温泉を楽しみ、子供達はレンタサイクルで牧場に向かい乗馬体験をし、夕方には家族が再び宿に集合する。このような旅程も参加者全員がGT会員証を持参しての行動なので安心である。システム上で個客の現在位置（通過位置）が把握されているので事故防止や行動遅延管理などにも役立つ仕組みとなっている。

⑤産地直送通信販売機能

都会に居ながら、日常的に飯豊町を感じていただくことも大切である。ここでは主に食材を中心にした産地直送販売をホームページ上に展開することとした。飯豊町に居なくても家庭の台所と町を常に直結する仕組みの一つとなる。通信販売は日通商事の既存システム機能に乗り入れることで、簡易に、廉価での利用が可能となる。

⑥手荷物宅配手配機能

グリーン・ツーリズムでいろいろな体験をしたり、ついつい多くの特産品を買い込んで



たりすると荷物が多くなる。農作業体験をするのにMY作業着やMY農具に凝る人もいる。そこで「手ぶらでグリーン・ツーリズム」を合言葉に、手荷物は宅配を利用することを勧めた。日本通運のペリカン便の集荷手配画面に連動したり、会員証をペリカン取り扱い店に提示すれば宅配料金割引の優遇措置を受けることを試行する。

⑦手紙（メルマガ、DM、アンケート調査）機能

実際のツアーのみでなく、日常的な交流を促進することがグリーン・ツーリズムの成否に関わる。「企業のふるさと（個人の新たなふるさと）」の母からの手紙として会員にはメールマガジンやDMを定期的、および随時に送信する。会員証による参加認証データを保持するので、会員の志向に即した情報伝達サービスが可能となる（個人情報取り扱いについては要検討）。また、常に顧客志向であるために会員宛にアンケート調査などが簡易に行える機能を設け、顧客の最新のニーズの把握に取り組む。

⑧ブログ交換機能

ブログの交換・掲示板の利用による日常的交流も大切である（この機能はシステムとして稼働済み）。飯豊町からの一方通行の情報提供にならないように、また、都市住人と共に飯豊グリーン・ツーリズムを構築できるようにするための重要なサロンの役割を果たす。さらに、町内の受け入れ者同志、または町内の一般人がグリーン・ツーリズムの成り行きを探るためのページとしても、町全体のグリーン・ツーリズム事業への意識醸成を図る手段ともなる。

⑨顧客利用代金キャッシュバック処理機能

「ポイント付与のみグリーン・ツーリズム会員証」、「クレジット機能付きグリーン・ツーリズム会員証」それぞれの利用者に対し、利用代金のキャッシュバックなどメリット供与の仕組みを検討する必要がある。たとえば、クレジット機能付きのGT会員証の利用者に対しては、毎月、顧客毎のクレジット利用額を集計し、飯豊町グリーン・ツーリズム受入機構名で顧客へのキャッシュバックを行うための提携クレジット会社へのデータ送信を行う。ポイント付与のみ会員証の利用者に対しては、毎月、ツアー中に利用しなかったポイント残数を集計し、顧客へメールなどで通知し、再来を促すことを機能に盛り込む。

⑩運営支払決済処理機能

グリーン・ツーリズム参加者が会員証を利用して支払った代金を集計し、関係運営先への料金再配分を行う必要がある。たとえば、受入先（体験、宿泊、飲食、物産など）の実コスト比で売上額を按分し、再度受入機構内で売上を割り振ることをしたり、受入窓口や発送窓口費用の支払い、通信販売・クレジット会社への手数料支払いな

ど、運営費の計算決済機能を持つ必要がある。

⑪販売・利用統計処理機能

顧客が受入機構各施設でグリーン・ツーリズム会員証の認証を受けることで、個人行動（体験参加や物産店への立ち寄り、物品購入など）がデータベースに蓄積され、実績作成やマーケティングに活用できる（ただし、個人情報の取扱いについては検討要）。各種収支、実績集計、販売統計、立ち寄り件数の把握などにデータベースを活用し事業運営にフィードバックすることを目的とした機能である。

カ 旅行事業の新ビジネスモデルの創造・Y社とのコラボレーション

飯豊町では、この度の実験をもとに、Y社とグリーン・ツーリズム（パッケージツアー）開発を進めている。現存する「待っている受け入れ側に個人客を送り込むスタイル」によるグリーン・ツーリズムではなく、共生・対流のもつ効果を享受すべき対象のマーケティングを進め、そのターゲットに合致する受け入れ側を探し、協働によるパッケージツアーの開発によるビジネス化である。

飯豊町のよさを広く都市住民に開放し、多くの来町者を呼び込むために、その協力者を日通以外の協力者も増やすことを目的に、飯豊町・日通・Y社とのコラボレーションに向けた顔合わせ会議が行われた。具体的には、飯豊町観光協会にアプローチのあったY社・山形営業所とのコラボの可能性を探ることになった。

飯豊町としては、グリーン・ツーリズムを生業化・ビジネス化することが最大の目的であり、今後個人客もターゲットにする上で集客面での協力を要請、また、日通としては、飯豊町のグリーン・ツーリズム



の事業化を応援する立場から、Y社の介入を否定するものではなく、物販および手荷物等の物流を担当するなど、旅行企画面や旅行に関わる宅配部分でY社と協働し、飯豊町・日通・Y社3者のコラボレーションの可能性の追究を表明した。

Y社では、新聞チラシによる募集旅行（不特定多数向け）を中心に事業展開し、50～60歳代を中心にした割安の日帰り、数泊の俗に言う旅行を中心に実績を伸ばしている。Y社自体、基本は発地側営業所企画による発地側営業をしているが、山形営業所は独自の方向を目指して動き始めている。

たとえば、インバウンド＝着地発想による企画＝地元の観光地を探し最終的に外から人を集める、また、地元を応援し、一緒に観光地を創っていく手法で、県内で観光地を育て、県内で顧客を集め、フィールドが完成した段階で東京からも集客する手順をとることを目指す、といった内容である。

具体的事例として次のようなものがある。①置賜地区では第3セクターのローカル鉄道（フラワー長井線）の活性化を目的に長井線を目玉にした商品開発（9月には県内

からバス6台の動員実績)、H社も同様商品を開発するなどの動きも出た。②巡回駄菓子屋 地元の子供達とその親を集客する手法である。

しかし、J社、K社などが先駆者としてすでに地位を築いているのとは違って、体験型、学童、団塊向けなどのグリーン・ツーリズムの実績はない。そこで、地元の新たな観光地を創るという意味でY社・山形営業所の目指すところと同じであり、興味を持っている。Y社・山形営業所は14人の企画担当者があり、「極端な言い方をすれば『チラシの内容だけで人を集める』ことができる」という。

Y社の見解として、3者コラボの可能性について、①企画、プロデュース共任せて欲しい、その時は飯豊町グリーン・ツーリズムのコンセプトが振れぬように注意して取り組む、たとえば、「日通の旅行企画でY社が販売するもよし、逆も可能」、「商売ベース抜きにしても、個人ベースでも取り組みたい内容と考える」。②コラボの可能性を検証するために、今後現状詳細、方向性などを把握し、その上で企画書を作成したい。

今後の進め方として、まず、飯豊町＋観光協会とY社で現状把握と企画イメージ作りのための打ち合わせを開始する。その後、日通も参画することになった。

平成19年1月29日、町がY社・野村所長と面談した。町としては、現在実験事業で取り組んでいる「グリーン・ツーリズム」を、次年度以降、日通のみならず主に新潟を含む東北7県を対象に、一般的なものとして継続していきたく、誘客やプラン作成について、協力を依頼した。

これに対し、Y社は、個人客より団体ツアーが主であり、方法として飯豊町のみならず、近隣市町の観光と提携した取り組みを行えば、お客にとってはより魅力的なものになると考え、飯豊町だけで完結するのなら、よりインパクトが強いメニューが必要になるとの見解を示した。

また、今後の取り組みも、やはりストーリーがある取り組みがベストで、たとえば、村山市では蕎麦をテーマに春夏秋冬の取り組みをしており、4回参加での参加料をもらっている例を上げた。今後の対応として、観光協会や物産館が実施しているイベントと調整し、日帰りプランを作成し、協議していくこととなった。

(4) 「日通の杜」構想とその到達点

ア 「日通の杜」構想の背景

日本通運は、物流の総合的企業として国内はじめグローバルにその営業を展開している。物流の主な手段はトラック、船舶であり、それに伴いCO₂の排出も相当量に達する。CO₂という地球温暖化ガスの削減に少しでも貢献するために、飯豊町内に「日通の杜」を設置する方向で検討している。日本通運は、「日通の杜」での森林活動を通し、積極的に社会貢献活動を行ないながら、あわせて従業員のゆとりと豊かさを実現できるように努力し、グローバル・ロジスティクス企業として、企業の社会的責任(CSR)を果たすことができる「杜」を目指すことになる。

日本経団連によれば、企業の社会貢献とは「社会の課題に気づき、自発的にその課題に取り組み、直接の対価を求めることなく自らの資源を投入すること」とされている。具体的な社会貢献として、次の課題の取り組みがあげられている。

- ①地球温暖化防止に寄与する。そのためには、燃料使用削減や環境配慮車の導入などとともに、排出CO₂に対する措置として森林活動によるCO₂吸収を行う。
- ②放置された森林の整備により、森林荒廃を防ぎ、森林のもつ公益的機能である水源涵養機能、土砂流出防止機能や風致機能を高める。
- ③多くの社員が森林活動に関わることにより、環境保全の意義や自然の仕組みなどを学び、環境の大事さを体験により感じ取ることができる。
- ④多くの企業に、環境の重要性に気づいてもらい、事業活動そのものを環境に配慮したものに転換し、環境を企業戦略の中心にすえてもらう先進的な役割を担う。
- ⑤地方自治体や地域の団体、個人と交流し、相互の信頼関係の中で地域振興に寄与する。

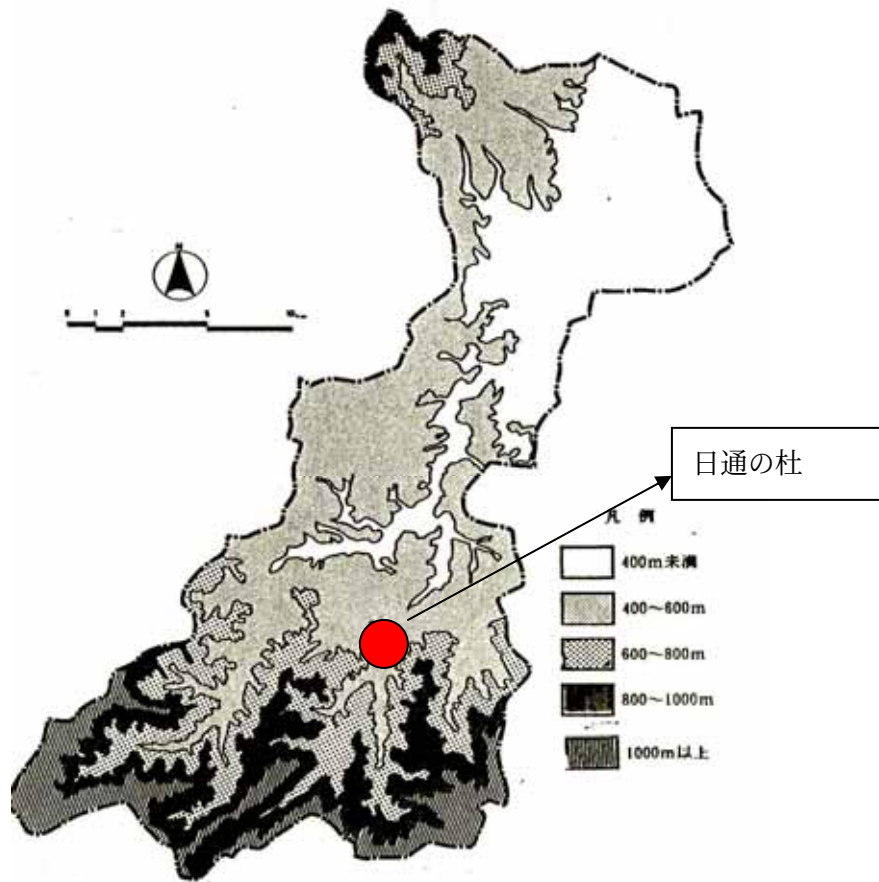
日本通運もこうした社会貢献の環境事業に取り組むことにより、企業価値を高めると、また、前述したとおり、「暮らしといのち」の礎である農を中心にすえた、共生、持続性、健康を追究する21世紀ライフスタイルに呼応する“21世紀ライフビジネス”の総合プロデュースの一環としてとらえるとともに、企業の社会的価値の向上につなげる考えである。

さらに、平成19年10月に創立70周年を迎えるにあたり、『創立70周年記念事業実行委員会』を設け、『企業理念、安全シンボル、社会貢献』の3つについての事業展開を検討しているという背景もある。その検討のなかで、委員会の下部にあるワーキング部会(社会貢献事業部会)において、飯豊町より提案を受けている「日通の杜」(70ha)での森林育成と管理が検討されている。最終決定は、取締役会を経て決まることになるが、4月にも内定できるように準備を進めている。

イ 「日通の杜」の概要

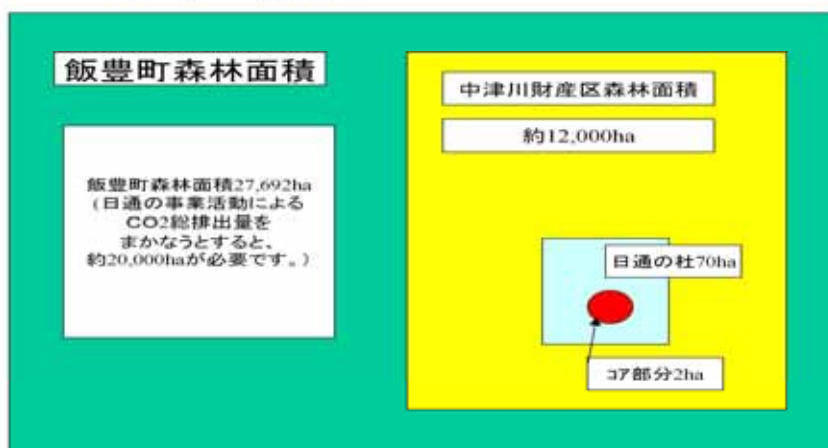
山形県西置賜郡飯豊町小坂地内にある中津川財産区有林のうち70haを活動エリアとし、そのうち2haをコア部分として中心的に活動する部分とする。コア部分は落葉樹二次林いわゆる雑木林で、林齢は約40年生のナラが中心的に生育している。その他、活動エリアには落葉樹二次林の他、スギ植林地などもあり、針葉樹、広葉樹の両面の森林の効用を確認することができる。

日通の杜の位置



図一 標高区分図

日通の杜の概念図



周辺には霊峰飯豊連峰がそびえ、白川ダム・白川湖が隣接している。ここは第1回山形県次代につなぐやまがた景観賞の知事賞を受賞するなど、人々にやすらぎと潤いを与えるなど優れた風景を形成している。また、宿泊施設としてホテル、コテージ、旅館、オートキャンプ、キャンプ場などがあり人々の多様なニーズに合わせた活動ができ、県営施設の源流の森なども隣接しており、環境学習や森林施業のサポートなどできる。

中津川を含めた置賜地方には、森の恵みを敬い、感謝し、さらに自然の力を畏敬する証として、「草木塔」という石碑を建立する文化がある。これは、「山川草木国土悉皆成仏」という森に生きるすべての生き物たちに感謝する石碑で、全国でも置賜に集中している。



現在確認されている江戸期の草木塔は34基、うち32基が中津川を含む置賜に存在する。32基のうち17基は米沢、次いで川西町9基、中津川に5基ある。この「草木塔」

の文化は、森と人との共生の思想でもある。またこの地域は、常緑の低木ユキツバキの群落があり、世界一の植生地ともいわれている。

「日通の杜」は、「森と人との共生の思想」に基づき、「杜づくりは人づくり、人は杜で生かされている」ことを学び、体験し、感じ、楽しみ、多くの人々に杜のすばらしさを知ることにより、心身ともにリフレッシュし、意欲を持って業務に励めるような杜づくりを目指す。一方、化石燃料を利用して事業活動をしている企業として、地球温暖化ガスであるCO₂の吸収源としての「杜」の育成も目指す。



そのために、町、財産区やNPOなどとの連携で杜づくり運営委員会などの組織を形成し、その組織の中で、杜づくりの企画、コーディネート、運営、指導を行う方式を採用する。この場合、県単独事業の「企業の森づくり事業」にエントリーすることを検討している(後述)。

森林の施行方法は、地域に根ざした燃料林の杜づくりを実践する。中津

川地区には、大正時代に始められた燃料林制度というものがあり、住民に平等に4haの林地を貸し与え、毎年1a 伐採することにより40年で森が循環するようになる制度である。はじめの1a は薪になり、その裸地からはワラビなどの山菜を採取、10年程度の叢林は炭焼きの材料に、40年の樹木は建築や家具などの材料となる。

この制度は、第一に森の計画管理を行う地域計画の思想、第二に住民すべてが共存するという共益の思想、土砂の崩壊防止や水源涵養機能など森全体の機能を落とさないという公益の思想に貫かれている。

今日、中津川財産区は、日本最大の財産区(12000ha)であり、国際的にも評価され始め、平成18年にはインドネシア、ラオス、エチオピア、アチリ、ペルー、フィリピンなど11カ国からの研修・視察があった。

4つのメニューで目標にアプローチする。第一のメニューは「森の文化と技を学ぶ・遊ぶ」ことで、「草木塔」の文化や所在を知る、農具や民具などをおして昔の循環の生活を学ぶ、つる編みや木片などでのクラフトに挑戦する、炭焼きなどの技を体験する。第二のメニューは「森の植物や動物を知る」ことで、春先の桜と残雪や秋の燃えるような紅葉を感じる、四季の変化と季節ごとの地域の植物や動物を知る。第三のメニューは「森を散策・リフレッシュする」ことで、サイクリング・早足トレッキングなど森林を体験するメニューを組み合わせるとライする、森の静寂に身を寄せて心身ともにリフレッシュする。



第四のメニューとしては「森の整備を体験する・森を創る」ことで次の7つを用意する。

①森林の伐採方法や木材の利用などを体験する、②伐採樹木や森林の中で隠れ家や簡易ハウス・休憩所などを作る、③伐採した樹木を利用してチップロードにしたり階段をつくるなどの多様な道づくりを行う、④桜の杜・紅葉の杜・ブナの杜など樹木に特徴をもたせた杜作りを行う、⑤稚樹の植栽、樹木から生産されるきのこなどを楽しむ、⑥チップでカブトムシの森づくりを行う、⑦チョウの森づくりを行う。



ウ 「日通の杜」の到達点

森林育成には、当面の収入を行うための作業(山稼ぎ)と、孫の代までの完成した森林になるまでの地道な作業(山仕事)の2つの作業があり、これらを「杜づくり」に活かすには長期間の管理が必要である。そのため、「楽しかった」で終わってしまうイベント

的な取り組みではなく継続的に行う必要があり、その作業をこなせるようにするには一人一人のレベルアップ、人材の育成も必要になる。これによって、チームワークや計画性、安全性の認識を持った楽しいボランティア活動が可能となる。一定のレベルになるように、たとえば下記のタイムスケジュールをもって杜づくりを行う。

日通の杜 森林活動 タイムスケジュール例

項目	内容	1年目				2年目				3年目				4年目				5年目			
		春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬
森林研修	環境			●	初級									●	中級	地球環境と森林、マネージメント					
	道具		●	初級										●	中級	チェーンソーなど					
	安全	●	初級											●	中級						
	森作り理論			●	●	初級									●	●	中級	林業から建材への循環			
森林文化活動	草木塔		●																		
	クラフトする細工							●													
	ホルンづくり						●					▶									
	かんじき				●				●												
	炭焼き							●					●	●							
	家具づくり														将来的に						
森林の植物	動物探訪	●	●	●	●	随時	案内人がいればなおもしろい。														
森林散策		●		●		随時	案内人がいればなおもしろい。														
森林整備	伐採									●											
	伐出											行う場合									
	実習(地ごしらえ)																				
	植林									●											
	保育									○				▶			こし、肥料などを継続)				
	きのこづくり								●					▶	○	きのこ生育					
	道の整備					●	●														

また、これを確実なものとするために、県単独事業の「山形県みんなで支える森づくり推進事業」のなかの「企業の森づくり事業」(企業が森林所有者等と協定を締結し、森林の整備・保全活動を推進するための現地検討の開催、作業器具整備等の条件整備の実施することに対し、補助対象経費の2分の1以内を助成する)にエントリーすることとしている。申請の内容は次のとおり。

申請総額100万円、内訳は資料作成費1万円、チラシ作成等参加者募集・広報費20万円、作業路の開設・整備費15万円、地ごしらえ10万円、苗木代・資材費・のこぎり・チェーンソー・テント・講師謝金等森づくり活動費52万円、その他2万円。

なお、「日通の杜」の面積70haを活動エリアとしているが、この70という数字は平成19年に日通創業70周年を迎えるのを記念して設定されている。上記補助事業による活動経費の他に、日通から所有者である中津川財産区に対し、森林使用料が支払われることになっている。